池田自然史博物館



















今号から『生物多様性』というテーマでコラムを書かせていただく池田哲哉と申します。現在、民間の環境コンサルタントに在籍し、河川・湖沼や河口・沿岸域など水域の生物・生態系に関する調査・研究や、生物及び取り巻く環境を保全・整備するための方策の検討・計画・管理・評価といった職務に就いています。また、自然の風景や生物の写真を撮影することを趣味としており、仕事でもプライベートでも自然の中を“縦横斜無尽”に飛び回っております。

さて、近年耳にすることが多くなった『生物多様性』とは何なのでしょうか？　このキーワードにまつわる「条約」「法律」「施策」等のお堅い話はとりあえず置いておいて、簡単に言うと“地球上の生物が、バラエティに富んでいること”、つまり、複雑で変化に富む生物や生物たちが棲む世界（環境）そのものを示す言葉です。さらに一歩踏み込むと、『生物多様性』には３つのレベルがあります。①様々な生物の繋がりから構成される「生態系の多様性」、②様々な生物種が存在する「種の多様性」、③同種でも遺伝子が異なる「遺伝子の多様性」です。要するに『生物多様性』は、生態系のマクロな視点から種単体のミクロな視点に至るまで、生命や環境の豊かさを包括的に表す言葉なのです。

次号からは、私がフィールドの中で実際に出逢った生物の表情や行動、生息・生育する環境などについて、主に『多様性』という観点からこの誌面をお借りして紹介できればと思っておりますので、お付合いの程よろしくお願いいたします。

環境省　環境カウンセラー
NPO法人　nature works

池田　哲哉

来た・見た・聞いた　淀川雑記帳

万一の場合に備えて、アウトドアでの活動に欠かせない傷害保険。この保険は、突発的に発生した外来の事故により被った障害を補償するものだそうである。もちろん、熱中症もその対象になると思い込んでいたが、現実は甘かった。一般的なレジャー保険では、病気の一種である熱中症は、保障の対象外となるそうである。参加者が熱中症にかかっても、その方の個人的に加入している医療保険でカバーしてもらわなければならない。

熱中症は6～9月に発生件数が集中する。とくに、こどもは背が低い分、地面からの照り返しを強く受ける。また高齢者は暑さを感じ取る機能が低下しているため、発症に気づくのが遅いらしい。これからの時期、アウトドアでの活動予定がある場合、事前に充分な熱中症対策を講じておくことが重要である。保険は気休めと考えて、水分補給や長めの休憩をとるように心がけよう。
（編集長・石山郁慧）

川と人　人と人を結ぶ　河川レンジャー　淀川管内　VER RANGER

デザイン監修：NPO法人nature works　泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works　小村一也
取 材 協 力 ：人を自然に近づける川いい会
発 行 支 援 ：国土交通省 淀川河川事務所

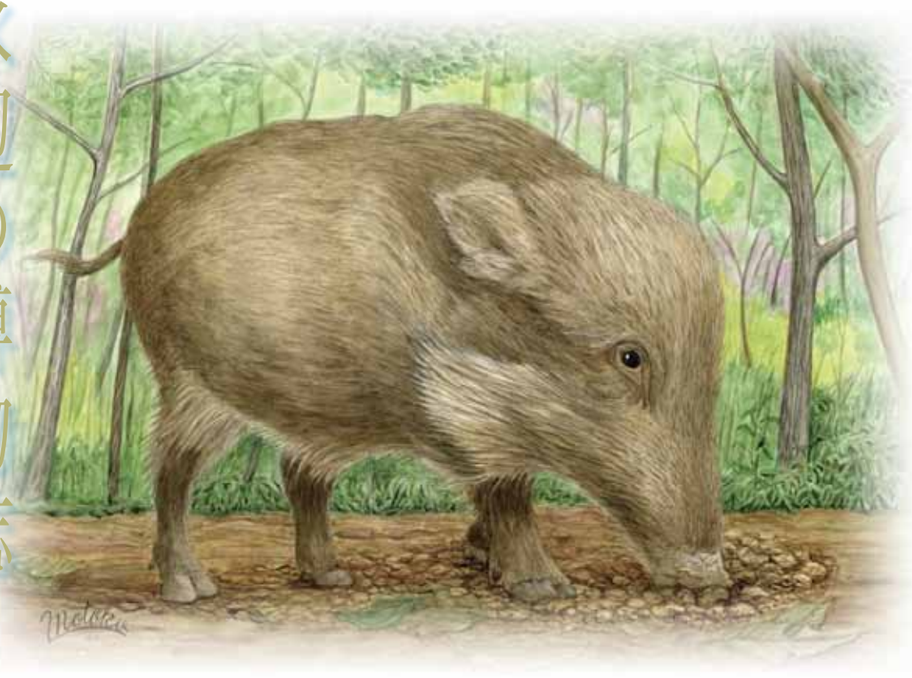
バックナンバーは、http://npo-natureworks.net/　の「無料の資料」からダウンロードできます。

淀川自然画報　2015年5月号　No.13

淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きものシグナル

YODOGAWA SHIZEN GAHO

水辺の博物誌



本来はとても慎重な振る舞いの獣王

ニホンイノシシ　*Sus scrofa leucomystax*

低山帯の川筋で生活するニホンイノシシは本州や四国、九州に分布し淡路島や小豆島にも生息しています。森林や薮で生活するのに適し、大きな個体では200kgを超えるがっしりとした体つき、そして雄の鋭く大きな牙は、ツキノワグマが生息しない淀川流域の里山では正に獣王。主に植物質を、時には小動物も食べる雑食性で、タケノコをはじめ、農作物の被害は昔から知られています。本来は神経質な昼行性なのですが、食料不足のため夜間、市街地に現れることもしばしば。人と野生の緩衝地帯も減ってきている昨今、私たちとイノシシの互いに難しい関係が続きそうです。
（画 / 原　素子）

発行責任者　淀川管内河川レンジャー・石山郁慧

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史

淀川水系魚類名鑑

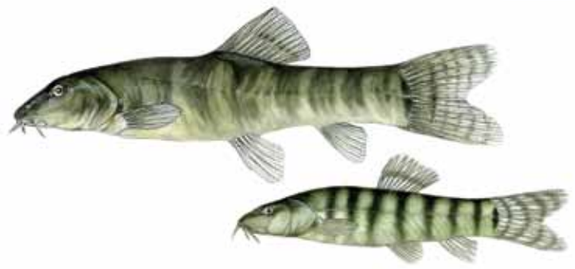
希少野生動植物保存推進員
横山 達也

アユモドキ

Leptobotia curta

コイ目ドジョウ科に分類される淡水魚。琵琶湖・淀川水系と岡山県の高梁川水系、広島県の芦田川水系のみにしか知られていない日本固有種です。生息域が限られ、また生息数が激減したことから、1977年に文化庁により国の天然記念物、2004年には、環境省により国内希少野生動植物種に指定され、採集や飼育などには許可が必要となりました。





全長は最大で20cm、口には6本のひげがあります。また稚魚から幼魚期には、体側に4～11本の横縞の模様がみられ、大変美しいのですが、成魚になると不明瞭になります。河川の中・下流域やそれに続く水路などに生息しています。昼間は岩などの物陰などに潜んでいますが、朝夕には活発に中層を遊泳し、水生昆虫などを食べます。繁殖期は6～7月で、河川や灌漑用水路など増水によってできた、流れの緩やかな植物が繁茂する一時的な水域で産卵します。卵は1～2日で孵化し、多くは生後2年で成熟。近年、河川の改修による生息環境の改変や産卵場の消失、産卵場所と生息場所との断絶などにより生息数が急激に減少し、絶滅の危機にあります。



口ひげは6本
顔を正面から見れば
ドジョウの仲間とわかる

under the water

花想鳥感

四季折々、水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館　主任学芸員
高田 みちよ

コアジサシ

水の上をスっと飛ぶ、30cmぐらいの白くて細い鳥を見たことはありますか？　時々ホバリングをして水中に飛び込みます。黒い頭と黄色の嘴が特徴です。この鳥はコアジサシ。魚を食べ、川原や海岸の砂礫地に営巣します。淀川では枚方大橋上流の砂州などで営巣しています。しかし下流ではほとんどが埋立てられ、人通りも多く、いい営巣地がありません。そこでコアジサシが選んだ意外な繁殖地が、淀川大堰の両側にある立ち入り禁止のコンクリートブロック敷き。ここはコンクリートの枠の中に石が組み入れてあるので、一見砂礫地のように見えるのでしょう。

コアジサシは大阪では夏鳥。ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリアなど世界の海岸に広く分布します。アジサシ類はグライダーのような翼で海を飛び回り、渡りの距離が長いことでも有名で、コアジサシも冬はフィリピンやオーストラリアで過ごし、5月ごろに大阪にやってきてカップルを作り、繁殖します。オスはメスに魚をプレゼントする「求愛給餌」を行います。鳥も人と同じで、稼ぎのある男性がモテるようです。巣は砂地のくぼみ程度で特別な素材はなく、くぼみに砂とそっくりな色合いの卵を産みます。ヒナも砂とそっくりな模様で孵ってすぐに歩きだし、砂にうずくまることで敵の目を欺きます。



淀川大堰に出かけて
観察してみよう!
写真提供 / 池田哲哉



望遠鏡で観察していると、歩いているヒナは見えていても、しゃがみこむと砂に溶け込み見失ってしまいます。もし巣に近づこうものなら、親鳥が上空を飛びながら警戒します。あまりにも砂に似た卵、ヒナなので、知らずに踏み潰してしまう危険性もあります。成鳥が声を立てながら周りを飛び回ったら、すぐに元の道を戻ってくださいね。

the waterside

the sky & land

水辺の虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省　環境カウンセラー　川島 大助

イシガイの生息状況に異変

城北ワンドに生息する国の天然記念物のイタセンパラをはじめ、タナゴ類はイシガイ等の二枚貝に産卵することが知られています。これまで淀川ではイシガイをごく普通に見ることができ、以前にもご紹介させていただきましたが、近年イシガイの生息を脅かす異変が起きています。今回はその異変についてご紹介させていただきます。

イシガイは、淀川では本流の緩流域やワンド等の川底が砂泥～砂礫帯に生息しています。春～夏の水温が高くなる頃に動きが活発になり、水際部の浅場で川底にイシガイの這った跡が見られ、その跡を辿ってみるとイシガイを見つけることができます。しかし、そのイシガイを哺乳類のヌートリア（南アメリカ原産のネズミ目）が捕食していることが数年前に確認されました。その後、さらに状況は悪化し、現在では城北ワンドの水際を歩くだけでも、至る所でイシガイをはじめ、ドブガイ、トンガリササノハガイなどの二枚貝がヌートリアに食い散らかされた死貝溜まりの食痕が確認できる状況です。また、同じような状況は城北ワンドだけでなく赤川ワンド、庭窪ワンド、淀川本流の水際などの広範囲に及んでいます。

雑食性のヌートリアに食べられたイシガイの死殻





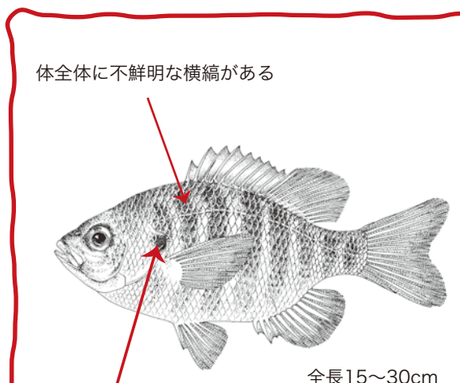
城北ワンドでは、イタセンパラが確認されたことからイシガイ等のタナゴ類の産卵母貝が残存していることが窺えますが、ヌートリアに捕食されたイシガイの中には、イタセンパラが産卵し、仔魚が二枚貝の内部に入っていたかも知れません。

近年、城北ワンドでは多くの方々の努力により、イタセパラをはじめ多くの在来魚が確認されるまでに回復してきています。また、ヌートリアによるイシガイ等の食害問題についても行政や研究者などにより、様々な対策についての検討が行われてきているようです。産卵母貝として利用するイタセンパラ等のタナゴ類の保全するためにも、このヌートリアによるイシガイ等に二枚貝の食害問題について、今後の早期対策の実践が期待されています！

the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100



AN INVADER

サンフィッシュ科　ブルーギル

Lepomis macrochirus



淀川管内河川レンジャー　石山 郁慧

北アメリカ北部原産の特定外来生物。ブラックバスとともに挙げられることが多いので、名前はご存知であろう。日本に入ってきたのは1960年と言われており、淀川で確認されたのは1973年。全長15～30cm。エラの近くに青く目立つ斑紋があることから、この名前が付けられた。西日本での産卵期は6～7月、1回の産卵数は21,000～36,000個というから凄い数である。繁殖力が強いだけでなく、オスは卵を守る習性があり、自分の子孫を守りながら在来魚の卵や稚魚を食い尽くす。それなら、人間がブルーギルをどんどん食そう！　この魚はスズキ目の白身で淡白な味わい。皮を剥いでしまえば臭みもなく、フライにすればかなり美味い。



ブルーギルの成魚
写真提供 / 河合典彦

ブルーギルの幼魚
写真提供 / 川島大助

